

A wooden bookshelf filled with books, a small metal pot, and a wooden box. The bookshelf is made of light-colored wood and has several shelves. The top shelf is filled with books. The middle shelf has a stack of books on the left, a small metal pot in the center, and a wooden box on the right. The bottom shelf has more books and a small metal object.

教科教育学コンソーシアム 第6回シンポジウム
テーマ:各教科のビッグアイデアとは何か
音楽科におけるBig Ideasを考える

日時:2026.03.08(日) 13:30~

於:広島大学教育学部&オンライン

発表:森 薫 (埼玉大学・日本音楽教育学会)

Big Ideasの定義と特徴

中村氏
趣旨説明より

- Big Ideasの定義:いくつもの小さなアイデアや概念、複数の経験を結びつけ組織化する統一的な原理(Mitchell et al., 2017)
- 5つの特徴:①あらゆる学習のための焦点を絞った概念的なレンズを提供する ②多くの事実、スキル、経験を結び付け整理することで、幅広い意味を提供する。理解の要となる。③その主題に関する専門家の理解の核心となるアイデアを指し示す。④非網羅性を必要とする。⑤転移価値が高い。(Wiggins & McTighe, 2005)

◆引き出される問い:

- そもそも音楽科のBig Ideasに関する議論にはどのような教科特有の背景がある？
- 音楽科において、Big Ideasはどのように論じられている？事例は？
- 音楽科の特質に照らしてBig Ideasを考えるとどうなるか？どのような視点を考慮に入れるべきか？

音楽科におけるBig Ideas: おおよその登場年と背景



- 英語圏において、音楽科教育におけるBig Ideasの議論は、**2000年代以降**になされている。数は**少ない**。※STEAM関連、音楽教授関連、民俗音楽教育関連等、やや周辺的なトピックのなかでの議論が散見される状況。
- Big ideasのほかに、Big **skills**、Big **understandings**といった語も用いられている(Barrett, et al.2018等)。
- Big ideas検討時に参照されるのは、90年代~の、音楽科の意義やNational standardに関する議論。
 - ✓ 論点①: 作品中心(例:シューベルトの歌曲《魔王》を学ぶ。)から、**実践・主題中心**(例:音楽における「反復と変化」を学ぶ。二部合唱する。人種差別と音楽の関わりについて考える。)の音楽科教育への転換
 - ✓ 論点②: **「脱エリート主義」「公平性(equity)」「社会正義(social justice)」**といった視点からの音楽科教育改革

音楽科におけるBig Ideas議論の背景 (1)Hargreaves らによるIIMとMII



音楽はコミュニケーションの主要な手段であり、その実践を通じて人びとは**2つのアイデンティティ**を形成する(Hargreaves et al. 2002)。

- ① identities in music(IIM)…文化的な役割と音楽的カテゴリーの中で社会的に定義される、音楽的アイデンティティ。例:自分で自分を「プロ・ミュージシャンである」「ハードロック好きだ」と捉えること/捉えないこと。
- ② music in identities(MII)…私たちがアイデンティティの他の側面を成長させるための手段・資源として、音楽を利用する、その仕方。例:自身を正義感のつよい人間だと認識している人が、人種差別を批判する内容をラップするヒップホップ・ミュージックを「自分をあらわす音楽」として愛聴する。

特に青年期以降の音楽教育において、音楽的アイデンティティをいかに扱うのは、重要な論点(Allsup R., E.2018、Philpott, C. 2018等で指摘)

音楽科におけるBig Ideas議論の背景 (2) Elliottらによる音楽の思考・知の論



音楽を実践として捉えるミュージッキング(musicking, musicing)の思潮が強まるなかで、Elliott(1995、第2版2015)は音楽実践に関わる思考と知を、多元的(multi-dimensional)なものとして類型化。

- 手続き的な音楽の思考・知
- 言語的な音楽の思考・知
- 経験的な音楽の思考・知
- 直観的な音楽の思考・知
- 状況的な音楽の思考・知
- 価値発見的な音楽の思考・知
- 倫理的な音楽の思考・知
- メタ認知的な音楽の思考・知

音楽実践に関わる知識は、大部分が非言語的で身体化されたもの、直観や印象や感情をともなうものである、というのが要点。

音楽科におけるBig Ideas議論の背景 (2) + α 日本国内でも身体知には注目が



美学者・教育学者の樋口聡(2017)は、「身体知」を次のように定義。

- 「**感覚-感情-認識-思考という連関**の中で個々人が獲得する**知恵**」(p.57)。
- 「**今ここに息づいて動きつつ感じ、感じつつ動ける身体**」が、「**新しい出来事に対して適切に判断し解決できる**」知恵(p.30)。

↓そのうえで下記を主張↓

- 実技教科は「**教科をはみ出す学び**」「**身体的な学び**」「**コモン・センス(共通感覚)**」を育てる学びを担ってきた＝**教科の意義**。
- (本来そうした学びは実は「**あらゆる学びに通底する**」。つまり、**いわゆる主要教科の学びこそ問い直されるべきでは?**
(pp.116-121))

音楽教育におけるBig ideasに関する 論考:Richardson(2007)



音楽教育や音楽家養成に蔓延る「エリート主義」「非民主的な徒弟制」「アイデンティティによる制限」「旧態依然」等を批判しつつ、音楽教育の“Big ideas”を考えるうえで参照すべき7つの問いを挙げている。

- ① 学習者に市民としての能力を育てるためにどんな方略をとるのか？
- ② 正規の課程と課外活動の間に、また生徒と学校の間、どのような橋渡しができるのか？
- ③ 倫理的で文化横断的なテーマを全ての分野に取り入れる方法は？
- ④ 大学や地域において民主的な関係性をどのように構築するか？
- ⑤ どのような方法で、生徒たちに現実的な結果が伴う問題に取り組ませるのか？
- ⑥ カリキュラムを、文化や価値観、相互関係、人間の尊厳、自由などの課題といかに結びつけるか？
- ⑦ 世界への理解を深める学習の、領域固有の/領域横断的な型とは？

社会正義や社会への意識をいかに育てるか、という視点に寄っている

Big Ideasの示され方 カナダの事例： BC州の音楽科におけるBig ideas



Grade10の「音楽科：歌唱」の科目におけるビッグアイデア



Area of Learning: ARTS EDUCATION — Music: Choral Music
(includes Concert Choir 10, Chamber Choir 10, Vocal Jazz 10)

Grade 10

BIG IDEAS

Individual and collective expression is rooted in history, culture, and community.

Growth as a musician requires perseverance, resilience, and reflection.

Music is a process that relies on the interplay of the senses.

Aesthetic experiences have the power to transform the way we think and feel.

Music offers unique ways of exploring our identity and sense of belonging.

①個人・集団での音楽表現は、歴史・文化・コミュニティに根差す。

②音楽家としての成長には、忍耐力、回復力、そして内省が要求される。

③音楽は感覚による音楽的やりとりに依存したプロセスである。

④美的経験は、私たちが考え、感じる方法を変容させる力をもつ。

⑤音楽は、アイデンティティや帰属の感覚に関する、独特の探究方法をもたらす。

- BC州におけるBig Ideasは、音楽“実践”についての理念。
- 知識や技能については示されていない。

カナダの事例:

BC州の音楽科におけるBig ideas



Big ideasの下に、Learning Standardsとして「期待される活動(≡技能や体験)」・「理解されるべき内容(≡知識)」がある。

◆期待される活動(抜粋)

- 大・小規模のアンサンブルやソロ演奏をする
- 意味や感情を音楽で表現する
- 即興し、創造的リスクをとる
- 多様な音楽ジャンルを学び、演奏する
- 音楽に影響を与える、時代や場所などの多様なコンテクストを学ぶ
- 技術を高め、表現力を豊かにする
- 創造や演奏における音楽家たちの技法を、描写し分析する
- 自身のパフォーマンスや音楽的成長について、省察する
- 合唱における各声部の役割について、考える

◆理解されるべき内容(抜粋)

- 音楽の要素、原理、記号、理論、歌唱技法、技術、方略、テクノロジー、創造的プロセス、動き、音、イメージ、形式
- 演奏者や聴衆や会場の役割、音楽を通じて得られる先住民族の世界観、異文化間をつなぐ視点、多様な音楽ジャンルの歴史、文化の盗用と剽窃に関わる倫理

社会文化的コンテクストと音楽実践との関わりが意識されている。知識や技能は実践のなかで必要に応じて学ばれる、という位置づけ。

日本の音楽科におけるビッグアイデア： 現行の指導要領(小学校)においては？



表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、**生活や社会の中の音や音楽**と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。👉 **社会的なコンテキストは意識されつつある。**

(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。【知識・技能】

👉 **知識・技能の習得が明示。但し技能は「必要性ありき」と強調。**

(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。【思考力・判断力・表現力】

👉 **「工夫する」「味わって聴く」の内実をより具体的に書いてもよいのでは？**

(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。【学びに向かう力・人間性等】

👉 **「愛好する」と共に「嫌いだと思う」権利の保障も？**

【提案】これからの音楽科におけるビッグアイデア

評価するもの
・しないもの
も要検討

英語圏の議論と、現行の学習指導要領、音楽科の特質に根差して：

◆音や音楽を通じたコミュニケーション

◇活動：

- 音や音楽を通じて(非言語により)、他者とコミュニケーションする(演奏、創作、即興)。
- 楽曲表現・鑑賞を通じて音楽家の意図を解釈する。

◆自文化・異文化の音楽

◇活動：

- 日本の伝統的な音楽や郷土の音楽、世界の諸民族の音楽、現代音楽の表現・鑑賞を通じた探究。
- 自身の世代の音楽(ポピュラー音楽)に関する探究。

◆歴史と社会の中の音楽

◇活動：

- 各国や地域の音楽史のなかで、価値がある/ないとされてきた音楽を知る。
- それを取りまく社会的課題を含めて、探究的に学ぶ。

◆音楽的アイデンティティの自覚と探究

◇活動：

- 自分や自分の属するコミュニティを音や音楽で表現する。
- 自分がどのような音や音楽を美しい/美しくないと感じるのかを探究。→他者のそれとの交流。

◆各活動に必要な音楽の知識・技能 ◇例：リズム、音階、テクノロジー

◆没入

引用・参考文献



- Allsup, R.(2016) *Remixing the Classroom: Toward an Open Philosophy of Music Education*, Indiana University Press.
- Barret, J., et al.(2018)” Meaningful connections in a comprehensive approach to the music curriculum” in *Music Learning and Teaching in Infancy, Childhood, and Adolescence : An Oxford Handbook of Music Education*, Volume 2. Oxford University Press. pp.141-159.
- Dewey, John (1980, originally 1934) *Art as Experience*. New York: Perigee Books. (デューイ, J., 河村望訳(2003)『デューイ=ミード著作集12 経験としての芸術』人間の科学社。)
- Dewey, John (1984 originally 1929) *The Later Works, 1925-1953 Volume 4: 1929 The Quest for Certainty*. Carbondale: Southern Illinois University Press. (デューイ, J., 河村望訳(1996)『デューイ=ミード著作集5 确实性の探求』人間の科学社。)
- Dewey, John (1986 originally 1938) *The Later Works, 1925-1953 Volume 12: 1938 The Logic: Theory of Inquiry*. Carbondale: Southern Illinois University Press. (デューイ, J., 河村望訳(2013)『行動の論理学—探求の理論』人間の科学新社。)
- Elliott, D. J. and Silverman, M. (2015) *Music Matters: A Philosophy of Music Education* 2nd Edition. New York: Oxford University Press.
- Hargreaves, D., J., et al.(2002) *Musical Identities*. Oxford University Press.

引用・参考文献 つづき



- 樋口聡他(2017)『教育における身体知研究序説』創文企画。
- MacDonald, A., R. et al.(2002)*Musical Identities*. Oxford University Press.
- 森薫(2022)『子どもたちは音楽科授業にいかに参加しているか——知識と探究のマイクロ・エスノグラフィ』ミネルヴァ書房。
- Philpott, C.(2018)“Teaching, Learning, and Curriculum Content” in *Music Learning and Teaching in Infancy, Childhood, and Adolescence : An Oxford Handbook of Music Education*, Volume 2. Oxford University Press. pp.222-239.
- Richardson, C., P. (2007) “Engaging the world: music education and the big ideas” in *Music Education Research*, 9:2, 205-214.
DOI: 10.1080/14613800701384318
- Schmidt, P. et al.(2017)*Policy and the Political Life of Music Education*. Oxford University Press.
- Schuler, S., C. (2011) ”Music Education for Life: The Three Artistic Processes—Paths to Lifelong 21st-Century Skills through Music” in *Music Education for Life*, Volume 97, Issue 4. pp.9-13.
- “Art Education” on the website for “British Columbia ‘s Course Curriculum”
URL: <https://curriculum.gov.bc.ca/curriculum/arts-education>